

# 評論文『安楽』への全体主義』及び「現代における人間と政治」の 教材的価値とそれらを用いた授業の実践報告

法政大学キャリアデザイン学部非常勤講師 福田 淑子

## (1) 評論文の授業の記憶と教材選び

毎年、国語科教育法を学ぶ学生たちに、高等学校の国語の授業で記憶にある評論教材を挙げてほしいと呼びかけると、多数の学生が「記憶にない」と答える。それではよほどの不勉強か、記憶喪失か、もしくはそれほど実のない授業を受けていたのかと思わざるをえない。私の高校時代の話だが、現代文の時間に岩波新書『日本の思想』（丸山真男）を1ページ目から一冊丸ごと授業をした教師がいた。今でも所有する茶色に変色したその本にはページごとに大量の書き込みと傍線が施されている。この授業で何を学び、何を考えたのかはすでに記憶にないが、授業の初めに「この評論文は大変クリアで無駄な説明のない文章の典型だ」といった教師の言葉が大変印象に残っている。今でもこの本を手にとると、何か大切なことを学び、読んでいるのだという、当時抱いていた誇らしい思いが蘇ってくる。

評論文が優れていても、操作的な演習と筆者の考え方を押し付けるだけの授業となってしまうと、単に消費される試験対策演習テキストとしての役割を果たすだけではないのか。それでは「読む」ということからほど遠い。教材は対象の生徒たちが、自分の拠って立つ世界に新たなホライズン（視野）を拓くことのできる力を持つものを選びたい。生徒がしかつめらしい論考に手もなくひれ伏すのではなく（狐につままれるのでもなく）、あれこれと思いを巡らし自由に議論を交わせる評論文の授業を展開したい。そのためには今日の時代性に対して感性が鋭敏に動くような教材を

掘り起こさなければならないだろう。

かつて、高校の現代文の授業で用いたいくつかの評論教材の中から、そのような手ごたえのあった作品を二つほど紹介する。これらは今年度の国語科教育法の授業で実際に取り上げたので、学生からの反応を含めて報告したい。

## (2) 評論の読み方指導について

### —例えば『安楽』への全体主義』の指導の留意点を挙げる

\*一般的に評論文の読みは、読み手がそれを評論するところまでいって成立する。独自の概念用語を用いて抽象的かつ論理的に展開される主張を、自分の住む世界の卑近な状況と照らし合わせ、個別の経験や想像力を通して提起された問題を検証する。それによって、生徒が新たな状況への視点を切り拓き、個別性を超えて他者に結びつく時代性を読み取れることを目指す。

\*読解が状況についての情報を与えるだけに終わってはいけない。また、例えば、「SNSに依存している自分は安楽への能動的ニヒリズムにはまっているのだからむなしのだ」というような自己反省を強いるような読みで終わらせても不十分である。主観的な辛さや自己批判に留まらず、自分のおかれている状況や自己の感情を言語化することによって、それらを客観的にまた構造的に眺め直せるような読みをさせたい。それによって、自己と社会（他者）が結びつく可能性が出てくる。限りなく人間を孤立さ

せていくのは、個々の状況を自己批判させるような読みである。つまり自己責任のような気分を強要される文章の読解に導くことは避けたい。

\*気を付けたいのは、本文の言葉にこだわりすぎると「道徳読み」になってしまうことだ。例えば、「何らかの意識的努力」を考えさせると、生徒はきわめて道徳的に反応して「自己反省」して終わる可能性もある。ゆえに「何か」を問うのではなく「可能性」を問うという形に変えてみる。そのことによって、自分のおかれている状況の「知的検証」に入れるのではないか。

### (3) 教材：『安楽』への全体主義 (藤田省三)

(出典) 初出は、雑誌「思想の科学」(1985年)。  
『全体主義の時代経験』(みすず書房)又は『ちくま評論選』(筑摩書房)

#### <教材について>

この作品は最近教科書に取り上げられていない。すでに時代遅れだからであろうか。だが、授業の後に学生がどのようなことを考えたかを振り返るシートを読むとそのようなは感じない。むしろ今こそ取り上げたい教材である。また、この文章は評論というよりは、「詩的な文章」(自我と自我が対話している)のような、それこそ「リズム」のある文章である。人間の精神生活にとって「リズム」が大切と語る4章は重要である。教科書に掲載された時には3章までしか掲載していなかったのだが、実際に授業をする際に、4章は切り離してよいかどうかも検討する必要がある。

#### <教材の論旨>

ここで用いられている「全体主義」とは、人々の価値観が一元化し、それ以外を排除しようとする現象(心の動き)のことである。本教材は、人々が追求する日常生活の「安楽」

が、全体主義となって社会を脅かし、人々から成就の「喜び」の感情を奪い取っていると論じる。

本論は安楽という概念を二項対立で提示している。一方は、「何らかの忍耐を内に秘めた安らぎとしての安楽(括弧なし)」、もう一方は、それは「私たちに少しでも不愉快な感情を起こさせたり苦痛の感覚を与えたりするのはすべて一掃してしまいたいという心の動き＝「安楽」(括弧つき)」と規定し、前者は自然な態度による安楽への追求、後者は「安楽への隷属」と捉える。今日、人々はこのぞって「高度技術社会が作り出す完結の装置や最新製品による『安楽』の歯止めのない追求をしている。そして、「高度技術社会」を支えているのは、「安楽」を求めるこのような心の動きである。

これまで、人間は生活の知恵や工夫などによる「苦痛や不愉快を避ける自然な態度」によって直面する不快なことを避けてきた。それに対して、今日では高度技術によって作り出される製品によって「不快の源そのものを根こそぎ追放しようとする精神」状態に追い込まれている。つまり、不快なものを世の中から一掃殲滅して、不快な体験をしない商品の追求に興じている。今や「安楽」を第一義的な追求目標とする能動的な「安楽の隷属状態」に人々が陥っているのだが、これは、人々に、成就の「喜び」という感情の消滅という代償を払わせ、「安らぎを失った安楽」という「能動的ニヒリズム」を生み出している。この「喜び」を失った一回的享受の反復がめまぐるしく繰り返されていく傾向は、現代人が、何らかの意識的努力をしない限りとどまるところを知らないはずである。

私たちの「身体の生活」もまた脈拍の繰り返しの中で進行している。リズムは全自然の全生活を貫く生の印である。一切の不快の元を根こそぎにしようとする「安楽への隷属」は人生からリズムを奪う。試練を含んだ道のり

を進んで乗り切ろうとする意志は、抑制の心と昂揚の心と組み合わせられ、山や谷の起伏の先にあるものを視る心の視力から生まれるのだ。

### 1) 高校での授業実践の一コマ紹介

次のような課題を出して、それぞれ現代社会の状況にあてはめて考えてもらう。

(課題プリント設問)

**A** 『安楽』への全体主義の「能動的ニヒリズム」とは、〈「安楽」喪失の不安から逃れるために「安楽」追求に狂い、むなしさを増幅させること〉です。現代の具体的な事象をひとつ例にとって具体的にはどんな気持ちや行動をすることか説明しなさい。

**B** 作者は「何らかの意識的努力」とはどういう経験をするかだと提案しているのか、文章の全体を通して答えなさい。また、あなたは現代の生活環境の中でそれが可能だと思うかどうか考察しなさい。

**A**の課題の解答例

①自分たちを覆う「孤立」や「寂しさ」を埋め合わせるためにメールやブログを多用することによって、「過剰なまでに多くの他人とのつながりを求めること」＝能動的 「それは豊かな人間関係や経験にならず、むなしく同じことを繰り返してしまう」＝ニヒリズム（「能動的なニヒリズム」と読みかえた例

②受験で「安楽」を得たいがために業者の作った試験対策プログラムに沿って「合格するためだけのむなし学習」を繰り返しているが、自分の失敗から生み出した工夫や知恵による苦難の克服がないと、人間としての自信につながらないと読み替えた例

③本文の読み替え例

能動的ニヒリズム → 過剰適応のニヒリズム

消費する側は『安楽』にしてくれるものをせわしなく追い求める」というより、すでに「次々に与えられる商品に過剰に適応していくことを強いられる」という状態で「むなしさを増幅」させているのではないか。若者の社会状況や会社への過剰適応はすでに飽和状態まできている。

**B**の課題解答例

- ①企業や商品開発者は、儲かることだけを目標として商品を開発し、売りさばくという競争経済に何らかの歯止めをかけなければならぬだろう。また、消費者の側の人々は、欲望を即商品にするという製品開発に振り回されない価値観を持つことも課題だ。
- ②シンプルで、且つ、いかようにも活用できるわずかな「物」だけで生きていける知恵を育てたい。

### 2) 学生のフィードバック(振り返りシート)より抜粋(受講者 23名)

本校での国語科教育法の授業の後、意見や感想を書く時間がある。授業内での討論を仕組む時間がないので紙面で討論してもらおうというわけだ。以下、『安楽』への全体主義を教材として用いた際の学生のフィードバックを抜粋してみる。実際は記名であるゆえ学生は誰の考えかが分かる仕組みである。

法政大学国語科教育法 24(11/25) 『安楽』への全体主義 一回目：読み始めの感想抜粋

\* この日の反応には、筆者から問題提起されている「とどまるところを知らない高度技術社会」というのは、実は手放して喜べないのか、では何が問題なのだろうかという自分への問いかけとして受け止めようとする態度が見られるものを挙げる。

- ①『安楽』への全体主義が50年くらい前に書かれた評論だというのは驚き。この頃から既に人間は利便性ばかりを追い求めて肝心なところは進歩していないのだ。

- ②高校のときに既に『安楽』への全体主義を読んだのだが、そのときよりも便利になっている今読むと、さらに心に迫るものがある。
- ③「lineの一斉連絡網などで短縮できた時間を、それぞれ何に使っているの？有意義なものに回せているのか」という先生の質問で、老子の「無用の用」を思い出した。
- ④今の子どもたちが苦痛を伴う快樂を避けているという本文の内容に共感した。私も昔は電話をかけるときに、相手の都合を考えたりして気遣いや思いやりを養っていたものだ。電話をかける時は、相手の生活を想像するという言葉が印象深かった。
- ⑤今の人は「苦痛」の存在は知っているのだ。でもどんなものか具体的に知らない。ゆえに降りかかってくるかもしれない苦痛におびえて、その恐れから苦痛を全面排除しようとするのではないか。そして、人々は時短、時短と頑張っているが、それによって手に入れた時間を結局スマホなどに取られているだけだ。
- ⑥自分たちで選択して自由に生きているつもりでも、多くの人は今日、SNSの中の情報に従って生きている。人は、昔は王様や將軍に従属し、今は機械に従属している。

\* また、以下のような戸惑いや反論もある

- ⑦どんどんハイテク化していく社会を良しとするか、悪しとするかは難しい問題だ。生まれたときから便利なものに囲まれそれが当たり前になっている私たちは、もっと便利なものをという欲求がありそれがない暮らしは想像できにくい。ハイテク化が悪いのではなく、それらをどう利用していくか考えて、上手く付き合っていくことが重要なのではないか。
- ⑧「苦勞からの解放の中で、人は快樂を感じる」というのは、確かに言えることだと思った。しかし、そうなると「不快」を経験しない今の世代より、昔の人のほうが安楽や

幸福を実感していたということになるのか。

- ⑨技術の向上による弊害はあるが、それならばなぜ技術の進化は止まらないのか。
- ⑩そういえば全自動掃除ロボット「ルンバ」が掃除をしてきれいになった部屋を見ても余り嬉しくない。汗水たらしてきれいになった部屋を見ると嬉しくなる。こう考えてみると「安楽への隷属状態」の例は回りごろごろ転がっているのに、それに気が付かないのはなぜか。
- ⑪Lineなど眼に見えるものだけに頼ってしまう現代は、むしろ人との繋がりが浅くて薄っぺらなものなのだろうか。

法政大学国語科教育法 25(12/2)2回目：学生の反応（・状況分析・自己分析・解決策の模索）

- \* この日は、筆者から提起された問題を学生たちが状況分析し、その解決策を模索し始める。
- ⑫高度経済成長がもたらす「快」を得るまでのスパンが、例えばマンモスを倒して食料を得た時代の「快」より短いということが「経験」を生むアクシデントに遭遇する余地を奪い、本来の「快」を奪っていくということではないか。こう考えると高度技術社会の悪とはそのような経験を生むアクシデントを奪ったことということになる。
- ⑬資本主義ゆえに高度技術社会の進化が止まらないというのは納得した。やめれば誰かが必ず損をする。だから止められない。止めるためには別の「もの」が必要になるが、それもまた害をなせば、イタチごっこで、変えようと思っても一人ではどうにもならない社会は怖い。
- ⑭時代は変わり行くものだが、その流れを止めることも、上手く付き合っていくこともなかなか難しい。流れに歯止めをかける方法は考えなければと思う。
- ⑮苦痛や経験を伴った「喜び」をこの社会の

中で享受するにはどうしたらいいのかをわれわれが考えていかなければならないと強く思ったが、さて、資本主義とハイテク、ゆとり教育に染まった我々がこの現状をどう打破できるかという問題に関しては世代間・専門の壁を崩して共に考えていくしかない。

- ⑩『安楽』への全体主義の「即座の効用を誇る完結製品」「即効製品」が今の時代にあふれている。確かに新しい製品は「こんなものがあつたらいいな」という感情からの出発が殆どだと思う。それを開発するのが理系の技術者なら、それによって引き起こる弊害やリスクを考えて対処するのは文系の人間の役目だろう。
- ⑪商品価値とはそのものの価値ではなく表象としての価値を買わされているのだというのは納得。
- ⑫今回の授業によって現代社会のスピード感について考えさせられた。現代人はすぐに返事や結果が出ないとイライラし、その相手に対して傷つける行為をする。「待つ」という感覚が薄れているのではないか。つまり、社会が発展していくにつれて人の感覚がより加速しているのではないか。いかに「待つ」ことができるか、そして、加速し何もかもが軽薄になっていく社会に疑問を持つことが出来るかが重要なのではないか。
- ⑬状況の奴隷になりがちな人間が、奴隷を脱することは難しい。スマホを手放すことは不可能だろう。苦勞する喜びを教えるしかない。子どもがこれを享受することしかない人間になるかどうかは教師次第ではないか。
- ⑭アップル社のスティーブ・ジョブズは自分の子にスマホを与えない教育をしているという話を思い出した。

\* このテキストを授業に活用したいという積極的な意見も出てくる。また、他の学生が

どう考えているのかという、他者への興味関心が広がっていく。

- ⑮近年の教育は、資本主義社会下での有能な駒を作ることが目的だと誤解されている。「『安楽』への全体主義」はそういうことをもう一度見直させてくれる素晴らしいテキストだと思った。
- ⑯『安楽』への全体主義は是非教材として使いたい。先生の「性急に結論を出さず、保留せよ。それが思索に耐えうる頭を作る。」という言葉はこれで何度目だろうと思うくらい聞いたが、それだけ大事だということか。
- ⑰振り返りシートを読み、他の人の意見を読むことで自分なりの考えも、より広がった気がする。
- ⑱振り返りシートを読むことで他の人が何を考えているか分かって面白かった。これだけ考えを膨らませられるなら評論文の授業を終えた後、討論会のような時間を取っても面白そうだ。
- ⑲前回の皆の振り返りの感想を読んで、それぞれの立場が見えてきたように思った。

法政大学国語科教育法 26(12/9)3 回目：反論(太字) / 技術革新を肯定したいという意見を取り上げる

- \* 筆者の論考を鵜呑みにせず、反論することも読みを深める重要な試行錯誤になる。
- ⑳この授業を聞いていると、どの情報を信じていいのか分からなくなる。
- ㉑『安楽』への全体主義について先生が価値観をひっくり返して双方の立場に立って話しているのが印象的だった。どちらの世界からも、物が言えるのは、どちら側の世界のこともよく知っているからだと思う。片方の世界のみを知り、別の世界のことを知らないで、その価値観を否定するのは良くないと思った。
- ㉒「なるようになれ」ではないが、快も苦痛

も時代や世の中のありようによって変わるので、比較しても仕方ない。革命やら技術革新で苦痛に修正を入れてきて、現在がある。人の手に及ばない苦痛にまでも修正の手が及んだということに対して、**科学技術の進歩は評価されるべきである。**

- ⑳ 評論はあくまでも筆者の考えであり、それを無条件で飲み込むことは、それこそ「安楽」になってしまう。**反対意見が出て、討論をして、最終的にそれぞれがそれぞれの意見を持つ形になればいいと思った。**
- ㉑ 私たちが新しい文明の利器を手に入ればそれに付随して新たな苦悩を抱えるわけだが、時代ごとにそうあっていいのではと感じるようになってきた。その時代の課題なのだから。
- ㉒ 自分は斜に構えてなんでも否定したがる傾向があるのだが、皆の意見は案外一致しているのだと思った。

法政大学国語科教育法 27(12/16)4 回目：  
この評論でどんな学習指導案を作るかという課題を指示する

- \* 授業者の立場からこの教材を用いてどのような授業を展開するのか、学生が思索している様子を紹介
- ㉓ 事実でないことを事実だと思わせるような働きが言葉にあること、言葉の影響や役割を考えさせられた授業だった。また、指導案を作っていく中で、どこに教材の価値を置いていくかが大切で、私たちは型に捉われない指導案作りを求められていると思った。
- ㉔ 言葉の意味解釈は本当に不安定なのだと思う。概念規定を確認するための必殺技が**対立概念を捜すこと**なのだと納得。確かに対立概念を変えることで、一つの言葉の意味が何種類にも変わる。
- ㉕ 自分には少し「批判する」能力が不足している。「『安楽』への全体主義」を読んでも

批判的には読めなかった。これでは押し付けの授業をしてしまう。これは何とかしなければならぬ能力だ。

- ㉖ この「振り返りシート」を記名式にすると、皆の意見に説得力が増す。無記名、匿名ではなく、それぞれ自分の考えを発表し、**お互いに異なる意見を闘わせるような授業を仕組みたい。**
- ㉗ 『『安楽』への全体主義』で、この間、自分はずっと筆者に否定的な立場をとっていたが、実際の高校での授業では生徒の意見をひとつに固めさせる授業をしないようにできればと思った。以前、先生が事故の件で警察に異議申し立てをしたという話があったが、**安心して異議を唱える環境を作るのも国語の教師の仕事としての役割である**と思った。
- ㉘ 機械にただ依存しているだけの人間は、元から備わっている人間の諸能力が育つことはないだろう。思想にただ依存している人間も同じで何かに依存する人間はそれによって失うものを考えなければならない。それでは**科学技術や思想の奴隷になるだけだと教えたい。**
- ㉙ 教育とは価値観を与えるもの。だから、子どもの可能性を信じるのなら任せておく、一歩引いて見るということも必要だ。『『安楽』への全体主義』で言いたいのは、**科学を批判することではなく、新たな情報を手に入れることに躍起になっているだけで、自分で考えることを放棄することへの批判ではないか**と思う。そこまで読ませる授業をしたい。

#### (4) 教材「現代における人間と政治」 (丸山真男)

(出典)『現代政治の思想と行動』未来社(1964年)又は『現代の文章』(筑摩書房)

人は、自らが置かれている状況に対して客

観的な視野を持たなければ、生の営みによる「喜び」を喪失する。破滅的な『安楽』への全体主義に巻き込まれて、人間の本来の幸福を追求する自由を奪われてはならない。前の評論作品ではこのような「高度技術社会の代償として、今我々に何が起きているのか」を読み取ることの重要性に気づかされた。しかし、人は、意識的にさえなれば本当に状況に巻き込まれず、他者を排除せず、己を見失わないでいられるのか。実は、それがどれだけ困難なことであるかを、過去の歴史から洞察した評論文を次に紹介する。

#### <教材について>

本作品は1964年に出版された政治学者丸山真男の『現代政治の思想と行動』（未来社）に所収されている「現代における人間と政治」全5章の内の1章と2章である。高校生用に脚注を付して『現代の文章』（筑摩書房）にも取り上げられている。筆者はチャップリンの『独裁者』のシーンのセリフを導入に用いて、この映画作品を解説していく。さらにあの恐ろしく価値の倒錯したナチス政権下で、普通のドイツ市民であった人々がなぜ疑問も持たず、不安にも思わず、反対もせず、平気で生活することが出来たのかを、アメリカのジャーナリストであるミルトン・メイヤーの『彼らは自由だと思っていた』の中に登場する一人の言語学者の「告白」を引用して検証していく。それは、国家統制下で普通の国民がどのように存在し、感じ、考え、行動するのかわかるということ、過去を振り返る形で語られるのだが、十分に我々の意表を突くものである。

#### <教材の要約>

チャップリンの映画『独裁者』の中のチャップリンのセリフ“What time is it?”とは「今何時か」ではなく、実は「現代とはいかなる時代か」を問うているものである。答えは「逆さの時代」だということである。これ

は、人間と社会の関係そのものが根本的に倒錯している時代、倒錯が社会関係のなかにいけば構造化されているような時代のことである。しかし、この問いのシンボリックな意味は「逆さの世界」の住人にとっては、逆さの世界が逆さとして意識されないという点である。逆さであることが日常化した人間にとっては、正常なイメージが倒錯しているのだ。価値の倒錯した世界では、非常識は常識として、正気は狂気として扱われる。だが、映画『独裁者』における倒錯は遥かに複雑である。転倒しているのは国全体であり、まっすぐに立っているのはほんのひと握りの人間に過ぎない。ナチスの突撃隊員にユダヤ人の床屋のチャップリンがささやかな抵抗する滑稽さを笑いながら、私たちはどちらの日常性の側から、どちらの倒錯を笑っているのか問われる。

さて、ナチス統制下のドイツ国民は、ナチ支配の12年間をどのような気持ちで過ごしてきたのだろうか。次々と起こった度外れた出来事をどう受け止めたのだろうか。戦後初めて知らされた出来事があったにしても、知っていたはずの出来事もあまりにも多い。普通の仕事を持った普通の市民の生活と感覚が、制服を着たSS隊員のそれと完全に同化することはありえない。確かに彼らの一人一人がナチ党員と思想や性格が同じになったのではなかった。ただ、彼らの住む世界がナチになったのだ。なぜ容易く多くのドイツ国民が順応したのか。その疑問を解く糸口として、一人のドイツ人の言語学者の告白を次に紹介する。

「・・・けれども、何十人、何百人、何千人という人が自分と一緒に立ち上がるというようなショッキングな事件は決して来ない。まさにそこが難点なのです。もしナチ全体の体制の最後の最悪の行為が、一番初めの、一番小さな行為のすぐ後に続いたとしたならば一そうだ、そのときこそは何百万人の人が我慢のならぬほどのショックを受けたに違いな

い。・・しかしもちろん、事態はこんな風な起り方はしないのです。」「気が付いてみると、自分の住んでいる世界は、かつて自分が生まれた世界とは似ても似つかぬものとなっている。いろいろな形はそっくりそのままあるんです。(略)けれども、精神はすっかり変わっている。にもかかわらず精神を形と同一視する誤りをずっと続けてきているから、それは気づかない。いまや自分の住んでいるのは憎悪と恐怖の世界だ。しかも憎悪し恐怖する国民は、自分では憎悪し恐怖していることさえ知らないのです。誰も彼もが変わっていく場合には誰も変わっていないのです。」(略) 少なくとも聴き手のメイヤーは、この長い告白に対して、「一言も発せず、言うべき言葉を感じ取らなかった」ほどの衝撃を受けた。

<教材としての価値と授業のねらい>—以下のロジックを読み取らせたい

- ①状況に飲み込まれない人間はまれである。状況から自由に生きることは難しい。
- ②どんな時代もある種の「特殊な状況」をばらんでいる。狂気(ファシズム)は特殊な人間にのみ生じる精神現象ではない。
- ③また、狂気はどちらの側のものか当事者にはわかりにくい。ファシストになるのは特殊な人間ではない。
- ④早急に白黒(善悪の二項対立)をつけたがるのは一つの精神の脆弱さである。
- ⑤繰り返される宣伝の効果によって、人は簡単に価値を転倒させる。
- ⑥コンフォーミズム(順応主義)は台頭してくるファシズムを支える。

#### 1) 学生のフィードバック(振り返りシート)より抜粋(受講者23名)

前作品の講義の最後の方に次のような感想があった。

\*『『安楽』への全体主義』がまるで丸山真男の文章に似ているなどと思ったら、藤田

省三が丸山真男の弟子だと聞いて納得した。

この学生の勘は当たっている。文体は異質だが、確かに切り口の異なる評論ではなく、一続きのまとまった作品の一部・二部というような形で読める。

法政大学国語科教育法 26・27・28『現代における人間と政治』:「振り返りシート」より

\* 事なかれ主義や無関心の態度は、結果的に差別感情や偏見を支持する。それが、ファシズムを生み出す温床にもなるのだが、起きている危険な社会現象に関心を持つことが、現実にはいかに至難の業であるかも読み取っている。

- ①下のレベルに合わせるのが所謂「平等主義」という話が面白かった。もっと上へという競争主義とは逆のようであるのに共存しているのがなんだか不気味だ。共存している時点で競争原理の抑止力にはなっていないのだろう。人としては下に合せ、経済の流れは上を目指すということが続けば、人が作ったものが人を無用化してしまうという部分で、ハンナ・アーレントの論文と通じるものがある。我々にとって、ナチスやファシズムは決して遠い問題ではない。
- ②宣伝によって価値が作られ、われわれもそれに誘導されているというのは、先に「いじめ」の問題として出された「誰かが嫌いだと思ったら、なんとなく自分も嫌いになる」ことに繋がる。子ども達は(大人も)、誰かが言ったことを、いとも簡単に価値ある意見として素直に受け取ってしまうのかと思う。なにげない言葉が人を誘導するということが恐ろしい。
- ③誰でもファシズムの中にいるときに、「これがそうだ」と「気づく」というのはとても難しい。
- ④「狂気は特殊な人間にのみ生じる精神現象



ではない」という部分で先生が「いじめをただ見ている人はファシストになりうる」と言っていたのが印象に残った。自分のすぐ近くで何か事件が起きると「止めなければ」という気持ちよりも「自分に害がないように」と思って、思考停止してしまう気がする。その中において、自分の立ち位置を適切に俯瞰するというのは至難の業だ。

\* 自分の住む世界の「当たり前」や「普通」は多文化社会では通用しない。そのことを考察した感想。

- ⑤自分が持っている価値観で普通に生活できているとつい全く異なる価値観を持った国があるということを忘れがちになる。反対の立場に立ってみるということは、とても重要なことだと思った。所属している共同体に順応していくことでその共同体がどう変化しているのかは、その中にいる人々には分からない。第三者の視点から見るのが出来て初めて、人は違和感を覚えるのだろう。
- ⑥「逆さまの世界」について、具体的に聞くとどれだけ大きい事なのか実感できた。東洋と西洋は良く比較されるが、日本は明らかに西洋側に変化しているのだと思う。そうして考えると先の『安楽』への全体主義は世界の変化に対して、それが決して「普通」ではないことに気付いた評論であると思う。世界も精神も変化する不確実なものであると理解し、自分を保ちたい。
- ⑦「ただ彼らの住む世界がナチになったのだ。」という個所やイスラム国の話を聞くにつけ、改めて「価値」というものは社会の雰囲気を作るものだと思った。自分の周りの意見に何の疑問も持たず、そのまま受け入れてしまう。そのような中で価値が作られてくるように感じた。

\* 昨日の常識が今日も当然のことかどうかは

「その世界の住人」には分からない。この事実を受け止めたとしても、そのなかで人はどのように考え、生きていけばいいのかは今後の課題である。

- ⑧「錯誤」のようなものは今も起ころうとしているのではないか。「秘密保護法」のことが頭をよぎった。日本が戦争をする国になるとネットでも騒がれたが、今もデモをしている人はいるというが世間の目は冷たい。「正しさ」「正義」というのは流動的だなど強く思う。
- ⑨「彼らは自由だと思っていた」におけるドイツ言語学者の言葉がとても恐ろしく印象的だった。気づいたら自分もナチの一員として過ごしていたのだという考えが、我々社会にも通じるなと思った。周りの流れに敏感に、そして少しズレているくらいがいいのかなと思った。「斜めの視線」から物事を捉えることも必要だと考えた。
- ⑩「誰もかれもが変わって行く場合には誰も変わっていない」という言葉に、はっとさせられた。絶対的な変化が目の前で起きていようとも、それを認識している己も変化していたならば、相対的には結局変化していないように見えるということだろうか。外から見たら確実に変わっているのに、当事者が一番それに気づけないというのは怖いことだ。
- ⑪「一人一人がナチスの考えになったのではなく、住む世界がナチスになった」というのは、いつ、どこで「そういう状態」になってもおかしくないし、「そうなった」ということに気付けないというよりむしろほとんどの人が気付こうとしないと思うので、非常に嫌な状態で、怖い心理だと思った。
- ⑫政治思想は良く分からないけど、人間性は良く分からないけど、アベノミクスは良く分からないけど・・・などで、丸山真男の文章を読むと、「何かやってくれそう」という大衆の空気感に呑まれて、政治家を

選んでいるような現象があるなら、恐ろしい。

## (5) まとめ

人間は長い時間をかけて共同体を形成して生き延びてきた。それ故、共存するための知恵を必要とする。そして私たちには、過去に起きた不幸な出来事を再現させないための見識と人間力を持つ義務と責任がある。過去から学ぶことは沢山ある。さらに、時代の行く末に関心を持ち、不幸な時代に逆戻りしないよう、その動きを不断に警戒し、監視し、少しの流れの変化にも繊細で敏感な目を持つこと。そして大状況を検証し批判すること。それは民主主義社会の人々の義務である。利潤の追求が第一義的になっている社会の価値観に巻き込まれず、小さな個人主義や利己主義に閉じこもらず、しかし、ニヒリズムにもラディカリズムにも逃げ込まずに、さまざまな人々が共存できる世界を成り立たせるためにはどうすればいいのか。今回取り上げたふたつの評論文は、それらにヒントを与える知的遺産となるものである。今日の高校生の教材としての価値は十分にある。国語の教師として、是非、授業者は一読して欲しい。そして、それらを優れた教材として生かすための方法をさらに研究・検討していきたい。